

「**愛ってナンボ**」 ルカ7：36～50

I 導入部

おはようございます。9月の第一日曜日を迎えました。愛する皆さんと共に、私たちの救い主イエス・キリスト様を賛美し、礼拝できますことを感謝致します。

長い夏休みを終え、小中高校生たちは、学校が始まります。長い間の休みで、何時間も授業を受けるということがなかったので、授業になれるのが大変だと思います。反対に、毎日家にいた子どもたちが学校に行き、主婦の方々、お母さん方はせいせいした、という感じで、ご自分の時間をたっぷり使って夏の疲れを癒していただきたいと思います。

私も礼拝と祈祷会以外の諸集会はお休みでしたので、ゆっくりと過ごすことができました。早朝礼拝がありましたので、日曜日の朝は大変でしたが、終わってみればとても幸いな時で、早朝礼拝も夏の季節限定の礼拝に定着しそうです。

9月が始まりました。残暑が残り、台風が発生や進路が気になりますが、私たちは、この月も私たちを愛し、最善に導いて下さるイエス様を信頼して歩みたいと思います。

今日は、「**愛ってナンボ**」という題で、ルカによる福音書7章36節から50節を通してお話し致します。

II 本論部

一、イエス様は全ての人の招待に OK なのです

今日は、イエス様が食事に招待されたお話しです。イエス様は、マタイ（レビ）がイエス様に召されて、それを感謝して友人の徴税人、罪人と言われる人々とイエス様と弟子たちと共に食事をしていた時、ファリサイ派の律法学者たちは、弟子たちに、イエス様の事を、「**どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか**」（マルコ 2:16）と問うたことがありました。ルカによる福音書7章34節では、「**見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ**」と言われたのです。ファリサイ派の人々は、自分たちは徴税人や罪人とは一緒に食事をしない。罪ある者たちと一緒に食事をしたらこっちまで汚れると言って、徴税人や罪人たちとは交わることを一切しなかったのです。けれども、神様から遣わされたイエス様は、徴税人とも罪人たちともよく一緒に食事をし、交わりをしていたのです。そのことがまた、ファリサイ派の人々には気に入らなかったのです。

今回、イエス様を食事に招待したのは、このファリサイ派のシモンという人物でした。どのような意図でイエス様を招待したのかは記されていませんが、イエス様の権威あるお話しには一目置いていたでしょうから、面と向かってイエス様と食事をしながらお話ししてみたいということと、やはり他のファリサイ派の人々と同じように、イエス様の言葉や行動からイエス様を陥れようという魂胆があったのかも知れません。そのような事があっ

たにせよ、イエス様はシモンの食事の招待に答えておいでになったのです。リビングバイブルには、「**快く応じました**」(7:36)とあります。

私たちが、食事をするのはやはり仲の良い人々、気が合う人々、気が許せる人々、安心できる人だと思えます。また、自分が共に食事をしたいと願う人でしょう。食事は、大切な交わりの時ですから、自分を悪く言う人や自分を陥れようとする人とは絶対に食事はしないでしょ。う。どんなにおいしい食事でも、気持ちの面で安心できないので、おいしい食事でもむなしくなってしまう。私たちが時には、気の合わない人や偉い人、難しい人と食事をしなければならない時があるかも知れません。そのような時の食事は苦痛であり、一刻も早くこの場から逃れたいと思うものです。

しかし、イエス様は、シモンがイエス様の様子をうかがって何とかしようと考えていた食事であったとしても断ることなく、食事に来て下さったのです。私という個人が、どのように難しく、性格が歪んでいようが、人格的に欠点があろうが、人間的な魂胆があろうが、イエス様は、その私を受け入れて、交わりをして下さるのです。イエス様は、あなたを否定することはないのです。

二、罪人に触れて下さる神様

37節には、この食事の席に、この町の罪深い女性が入ってきたというのです。当時は、このような席には、誰でも入ってきてよいという習慣のようなものがあつたようです。「**罪深い女**」とありますが、詳訳聖書には、「**格別に悪い罪びと**」とあります。リビングバイブルには、「**売春婦**」とあり、詳訳聖書には、「**有名な罪人、社会ののけ者、罪に身をゆだねきつた者**」とあります。イスラエルの律法からすれば、とんでもない人間だったのです。そんな人が神の聖者イエス様のいる、シモンが開催した食事会に急に入ってきたのです。一同はざわついたでしょう。一同は、汚い何かを見るように、しかめっ面をしたことでしょう。おいしい食事が台無しになったかのように、冷たい視線が彼女に集中したのです。

当時の食事のスタイルは、からだを横にして食事をしたようですから、彼女はイエス様の後ろから近づいて、イエス様が伸ばした足に涙をいっぱい落として、そして、自分の髪の毛で拭き、足に接吻し香油を塗ったのです。驚きの光景でした。シモンは言います。

39節のカッコです。「**この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに。**」ファリサイ派の人々は自分たちを清く保ち、汚れたものを遠ざけていました。それが神に仕える者であると思っていたのです。シモンは、イエス様が預言者なら、神の遣わされた者であるなら、この罪の女に触れさせ続けるはずがないと考えた。彼は、「**汚れた女よ。退け。近寄るな。ここから出ていけ。**」というようなことを期待していたでしょう。しかし、罪ある彼女に何も言わないような者は、預言者じゃない。偽物だと思っていたのです。

罪ある者は反省しろ。悔い改めろ。罪をただせ、と言われると辛く、悲しいものです。私たち人間は誰しも、愛されたいと願います。夫は妻に、妻は夫に、子は親に、親は子に、おじいちゃん、おばあちゃんは孫に、孫はおじいちゃん、おばあちゃんに愛されたいと強く願います。生徒は先生に、先生は生徒に、社員は社長に、社長は社員に、信徒は牧師に、

牧師は信徒に愛されたいと願うものです。

たとえ失敗や欠点を多く持っていて、罪を犯していても、自分には愛される資格はないと思っても、愛されなくてよいのではなく、愛されたいのです。私たち人間は、愛がなければ、愛されなくては生きてはゆけないのです。

欠点や悪い所を正せ。そうすれば愛してやろう。これが私たちの人間の愛し方です。悔い改めて、反省して、真面目になったら許そうが人間の愛です。しかし、神様の愛は、イエス様の愛は、あなたが罪を捨てて、悔い改めて、欠点を直し、正しい人になるならば愛するというものではありません。欠点だらけのあなたを、失敗の経験のあるあなたを、罪を持ったままのあなたを、そのままの姿で愛して受け入れて下さるのです。イエス様と共に十字架につけられた犯罪人は、悔い改めて、正しくなる時間はありませんでした。しかし、イエス様は、この犯罪人をそのまま受け入れ、天国へ招待なさったのです。

三、神様に罪赦された感動をもう一度

シモンの思いを見抜かれたイエス様は、たとえ話をされました。500万円と50万円を借りた人たちがいて、返すことができなかつたので、金貸しはどちらも借金を帳消しにしてくれた、という話です。イエス様はシモンに問います。どちらが、その人を多く愛するかと。シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方です。」と答えました。

ここでイエス様は、「罪深い女」と彼女を批判するシモンに言います。家に招待して当然すべきこと、足を洗う水をくれなかつた。しかし、彼女は涙で足を濡らし、髪の毛で拭ってくれた。あなたは接吻の挨拶もしなかつた。しかし、彼女は、足に接吻してやまなかつた。あなたは、頭にオリーブ油を塗ってくれなかつたが、彼女は、足に香油を塗ってくれた。47節を共に読みましょう。「だから、言っておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」多く赦された者は、より多く受け取った者、50万円よりも500万円許されたということは、許された額の大ききに、より多く喜び、より多く感謝するのです。赦された額、そのことの喜びが50万円許された者よりも大ききからこそ、より多くイエス様を愛するので、彼女はシモンの家の食事の席に出るといふ大胆な行為に出たのです。

シモンは、イエス様を食事に招待しながら、招待した最低の、当然の礼儀、歓迎もせず、おもてなしをしなかつたのです。

イエス様は、「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。」と言われました。多くの罪を赦された、つまり、罪が大きいとイエス様を愛する愛が増すので、イエス様に対する愛が大きくなる。だから、多くの罪、大きい罪を犯した方がよいということでしょうか。シモンは、罪深い女性より罪が少なかつた、罪が小さかつたので、イエス様に対する愛が少なかつたのでしょうか。他の人と自分とを比べて、私の方が罪は小さい。私の方が正しい。そのように考えることがあるかも知れません。罪は、多い少ない、大きい小さいで判断するものではありません。神様の前には全ての人は罪人なのです。1回嘘をつこうが千回嘘をつこうが、嘘は嘘、偽りは偽り、罪は罪なのです。

神様の前で、あの人に比べて私の罪は小さい、少ないということはないのです。同じ罪

人なのです。また、罪は他の人と自分を比べるものではありません。しかし、ファリサイ派の人々は比べていたのです。ファリサイ派の人々は、自分たちの罪は、小さく少なく見積もっていました。そして、人を見下し、ダメ出しをしていたのです。彼らの言葉や行動、心の中で人を裁くことこそ、神様の前に大きな罪でした。表面的には正しい人、信仰深い人を装い、内面は悪と自分中心の神様に遠い存在であるのに、神に一番近い者とし、徴税人や罪人を神様に見捨てられた者として裁いていたのです。

しかし、イエス様は、シモンが罪深い者だと決めつけ、批判した女性をそのまま受け入れました。彼女はイエス様に過去に罪赦された喜びと感謝を、強いられてではなく、涙で足を濡らし、髪の毛でぬぐい、接吻し、香油を塗るという行為をしたのです。彼女は、罪が大きいからより多く愛したのではなく、イエス様に罪を赦していただいた愛の大きさに感動して、応答して、イエス様を愛したのです。

Ⅲ結論部

ダビデが神様に選ばれた時、預言者サムエルは、長男のエリアブを見て、その容姿や雰囲気、この人が神に選ばれた人だと早合点した時、神様は「**人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。**」と言われたのです。目に見えるものも大切ですが、神様は見えない心を見られるのです。私たちは外見をりっぱに装い、良く見せようとしても、心は罪で満ちています。そのような私たちをそのまま愛して、私たちを救うためにイエス様を十字架につけ、罪の身代わりとして死んで下さったのです。そのことにより、私たちの罪が赦され、イエス様が死から復活されたので、私たちに永遠の命を与えて下さったのです。

人間の愛は、計算の愛、良くなったら愛するという条件付きの愛、奪う愛です。人間の愛はナンボでしょう。マイナスです。しかし、神様の愛は神であるお方、イエス様の命をささげて下さったのです。本当の愛とは、自分の一番大切なものをあげることです。父なる神様は一番大切な独り息子を、私たちに下さったのです。神様の愛はナンボ？イエス様の命、計算できない、額では表しきれないものなのです。そのような愛であなたはイエス様に愛されているのです。人と比べることなく、あなたになされた神様の愛、十字架と復活を感謝し、そのままの姿で愛して下さるイエス様と共に、この週も歩んでまいりましょう。